

博 多 23

—博多遺跡群第58次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第251集

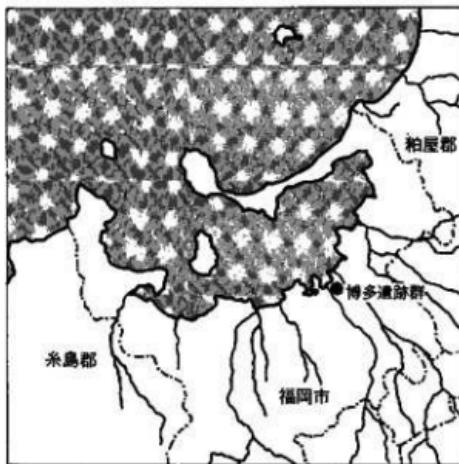
1991

福岡市教育委員会

博多 23

—博多遺跡群第58次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第251集



1991

福岡市教育委員会

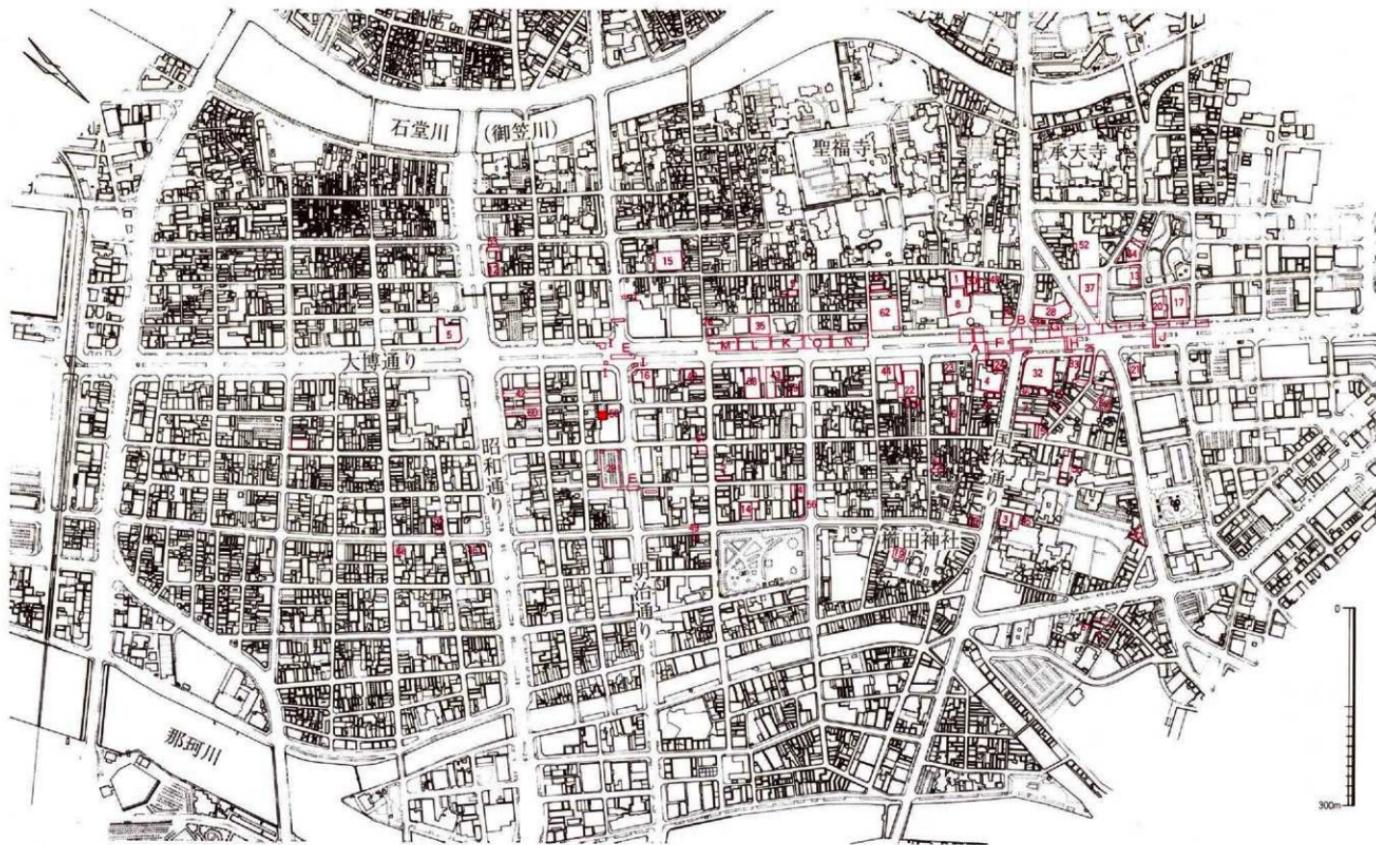


Fig. 1 博多沿跡群調査地点位置図

序

JR博多駅から博多湾にかけての市街地の地下には、古くから大陸文化との交流拠点として栄えた「那ノ津」・中世都市「博多」が包蔵されています。

近年、地下鉄の開通、道路の拡幅など都市基盤整備が進み、高層ビル化が進んでいます。これらの再開発事業に伴い、60次を越える発掘調査を実施しています。

本書は、明治通りに面した綱場町の第58次調査地点の発掘調査報告書です。

調査においては、古代末の遺物包含層と、中世の土壙や柱穴がみつかり、中世の都市の北への広がりを知るてがかりを得ることができました。

発掘調査から資料整理までの費用負担はもとより、多くのご協力を賜わりました第一生命保険相互会社ならびに清水建設株式会社九州支店をはじめとする関係各位に対し、心から感謝の意を表しますとともに、本書が文化財理解の一助となり、広く活用されることを願っています。

平成3年1月10日

福岡市教育委員会

教育長 井口雄哉

例　　言

1. 本書は博多区綱場町20、21-1・2の第一生命ビル建設に伴う事前調査として、福岡市教育委員会埋蔵文化財課が1989年10月6日から10月16日にかけ発掘調査を実施した博多遺跡群第58次調査地点の調査報告書である。
2. 本書使用の遺構実測図は、山口譲治、牟田裕二、石出晴美、井手かすみ、甲斐田嘉子、坂井昭美、山口朱美、山崎美枝子があたった。
3. 本書使用の遺物実測図は、土器を亀井明徳、甲斐田嘉子、立山郁子、木器は井手かすみがあたった。
4. 本書に使用した造構写真は、山口・牟田が、遺物写真は亀井があたった。
5. 本書使用の図面の製図は、遺物を浜石正子、入江のり子、撫養久美子が行ない、木器および遺構図については、山口朱美が行なった。
6. 本書使用の方位は磁北である。また、土師器の法量は口径一底径一高さの順に略記した。
7. 本書の執筆分担は、遺物については亀井が行ない、その他については山口が執筆し、総集は山口があたった。
8. 本調査出土遺物は、福岡市埋蔵文化財センターで一括収蔵・保管し、公開し活用していく。
9. 本地点出土人骨については、中橋孝博氏に分析をお願いし、本書に執筆していただいた。

本文目次

第1章 序説

1.はじめに..... 1

2.調査体制..... 1

3.遺跡の位置と立地..... 2

第2章 調査の記録

1.調査概要..... 3

2.層序について..... 4

3.遺構と出土遺物

1)土壤(SK)..... 6

2)溝状遺構(SD)..... 14

3)柱穴(SP)..... 14

4.包含層出土遺物

1)第1面検出時採集遺物..... 15

2)黄灰色砂層出土遺物..... 18

3)黒灰色泥炭層出土遺物..... 18

4)黒灰色粗砂層出土遺物..... 25

第3章 まとめ..... 28

第4章 博多遺跡群第58次調査出土中世人骨..... 29

挿図目次

Fig. 1 博多遺跡群調査地点位置図..... 折り込み

Fig. 2 博多遺跡群第58次調査地点地形実測図..... 2

Fig. 3 第58次調査地点遺構配置図..... 3

Fig. 4 第58次調査地点全景(東から)..... 4

Fig. 5 調査区東西壁土層断面図..... 4

Fig. 6 調査区南北壁土層断面図..... 5

Fig. 7 調査区土層堆積状態(北から)..... 5

Fig. 8 調査区土層堆積状態(東から)..... 6

Fig. 9 第5号土壤(SK-05)実測図..... 6

Fig. 10 第5号土壤出土遺物実測図..... 7

Fig. 11 第5号土壤出土土器(1)..... 7

Fig.12 第5号土壤出土遺物(2).....	8
Fig.13 第6号上層(SK-06)実測図.....	9
Fig.14 第6号土壤出土土器(1).....	9
Fig.15 第6号土壤出土土器実測図.....	10
Fig.16 第6号土壤出土土器(2).....	10
Fig.17 第6号土壤出土土器(3).....	11
Fig.18 第6号土壤出土青磁.....	11
Fig.19 第7号土壤出土遺物実測図.....	12
Fig.20 第7号土壤出土土器(1).....	12
Fig.21 第7号土壤出土土器(2).....	13
Fig.22 第7号土壤出土火鉢.....	14
Fig.23 第1号溝出土土器実測図.....	14
Fig.24 第1号溝出土土器.....	14
Fig.25 柱穴出土遺物実測図.....	15
Fig.26 第9号柱穴出土遺物.....	15
Fig.27 柱穴出土遺物.....	15
Fig.28 第1面検出時採集遺物実測図.....	16
Fig.29 第1面検出時採集土器(1).....	17
Fig.30 第1面検出時採集土器(2).....	18
Fig.31 黄灰色砂層出土土器実測図.....	18
Fig.32 黄灰色砂層出土土器.....	18
Fig.33 黒灰色泥炭層出土遺物実測図.....	19
Fig.34 黒灰色泥炭層出土銅鏡.....	19
Fig.35 黒灰色泥炭層出土土器.....	19
Fig.36 黒灰色泥炭層出土木器実測図(1).....	20
Fig.37 黒灰色泥炭層出土木器実測図(2).....	21
Fig.38 調査区上層堆積状態(北から).....	21
Fig.39 黒灰色泥炭層出土木器実測図(3).....	22
Fig.40 黒灰色泥炭層出土木器実測図(4).....	23
Fig.41 黒灰色泥炭層出土獸骨および種子.....	24
Fig.42 黒灰色泥炭層出土獸骨.....	25
Fig.43 黒灰色粗砂層出土遺物実測図.....	26
Fig.44 黒灰色粗砂層出土遺物.....	27
Fig.45 黒灰色粗砂層出土半瓦拓影.....	28

第1章 序 説

1. はじめに

明治通りに面した博多区綱場町の明治里跡地に、第一生命と明治屋によるビル建設が計画され、第一生命の依頼により埋蔵文化財課（以下、埋文課）では試掘調査を実施した。試掘調査の結果、現地表下2.8mで中世末の遺物が出土し、柱穴を検出した。この地域は通称「息の浜砂丘」の内陸部に位置し、これまで調査事例が少なく、試掘によって柱穴が確認されたことから埋文課は発掘調査が必要であると決定した。

以上の調査決定を受け、第一生命と埋文課は協議をかさね調査費、調査期間、出土遺物のあつかいなど契約事項がととのい、調査契約が成立し、本調査を実施した。

遺跡調査番号	8948	遺跡略号	HKT-58	
調査地地籍	博多区綱場町20、21の1・21の2		分布地図番号	048-A-1
開発面積	652.27m ²	調査対象面積	652.27m ²	調査実施面積
調査期間	1989年10月6日～同年10月16日			

2. 調査体制

調査体制として以下に示す組織を構成した。緊急調査のため充分なる体制を組むことはできなかつたが、調査依託者である第一生命および清水建設をはじめとする関係各位の協力のもとに、発掘調査および整理作業は順調に進行したことを明示して、協力者に謝意を表する。

調査主体 福岡市教育委員会文化部埋蔵文化財課第二係

教育長 佐藤善郎（前） 井口雄哉 文化部長 川崎賢治

埋蔵文化財課長 柳田純孝 第一係長 飛高憲雄 第二係長 柳沢一男

調査担当 山口謙治 遺物整理 亀井明徳

試掘調査担当 横山邦顯（文化財主事） 佐藤一郎 常松幹雄

事務担当 松延好文

調査指導委員 中橋孝博

調査補助員 宮田裕二（現佐賀市教育委員会） 浜石正子 入江のり子 推義久美子

調査整理協力者 石田靖美 井手かすみ 尾崎君枝 甲斐田嘉子 坂井昭美 品川伊津子

立山郁子 平野徳子 星子輝美 宮坂環 山口朱美 山崎美枝子

吉野佳子

3. 遺跡の位置と立地

福岡平野の博多湾岸には、砂丘が形成されており、砂丘は東から多々良川・御笠川・那珂川・櫛井川・空見川など北流する河川によって切られている。この砂丘上には多くの遺跡が所在している。博多遺跡群は、御笠川と那珂川に挟まれた砂丘上に位置し、弥生時代から江戸時代にかけての複合遺跡である。博多遺跡群は、大きく海側と内陸側の砂丘とその間に所在している。現在は標高4.2mから5mの平坦な地形の市街地となっている。

本調査地点は、博多遺跡群の北部の「息の浜」砂丘寄りの谷部の標高4.15m前後に位置している。国土地理院発行の5万分の1地形図（福岡）の北から16cm、東から16.5cmの位置にあたる。

本調査地点周辺では第16・29・42・60次の調査が実施されている。本調査地点から東80mに第16次が、南南西80mに第29次が、北西120mに第42・60次調査地点がある。

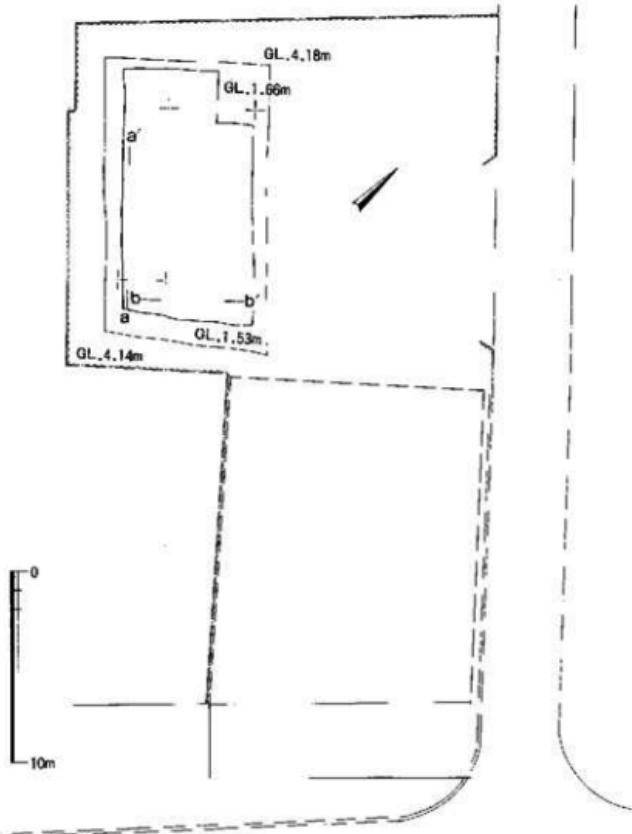


Fig.2 博多遺跡群58次調査地点地形実測図

第2章 調査の記録

1. 調査の概要

調査区は、明治屋ビル解体作業と発掘調査が並行するため、第一生命、清水建設と埋文課との協議によって、ビル建設予定地の北西部に設定した。本調査は清水建設による鋼矢板打込、表土すき取り（現地表下マインス2.5m）、そのほか調査整備の終了後、重機を降ろし、残存している現在の擾乱を除去することから始めた。その結果、現地表下2.8m前後の標高1.2m前後で、黄灰色～暗灰色の粗砂～細砂層を基盤として、暗灰色～黒褐色細砂からシルト・粘質土を覆土とする土壌などの遺構が検出できた。

検出遺構としては、近世から現代の井戸1基、中世の土壌20基、溝状遺構2条と柱穴140個がある。また、遺構面下のだめおし調査を行なった結果、古代末の遺物包含層を2枚確認した。

本調査地点検出の遺構は、土壌をSK、溝状遺構をSD、柱穴をSPと遺構記号を使用し、検出順に遺構記号の後に2桁の通し番号を付した。（例、SD-01・SK-02……）。また、柱穴については

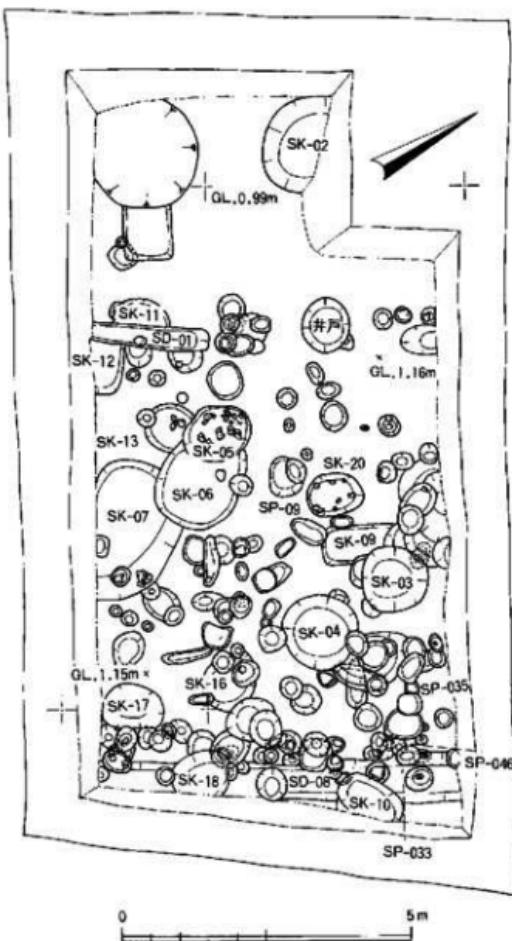


Fig. 3 第58次調査地点遺構配置図

遺構記号の後に3桁の通し番号を付した。(例、SP-001~SP-140)。なお、本文中では、遺構名と遺構記号を併用している。

本調査地点の出土遺物については、本遺跡調査番号である8948のあとに木器は00001からの、金属器は00251からの、土器は00301からの通し番号を登録番号としている。なお、本書のなかでは、遺構および包含層ごとに通し番号を付した。



Fig. 4 第58次調査地点全景(東から)

2. 層序について

本調査地周辺は、通りに面したところは商業ビル、通りからなかに入ったところは雑居ビルと市街地で4m前後のはば平坦な地形をなしている。4mの等高線で追うと、本調査地点を通じ東へ延び明治通りの中央部でカーブをとり、西へ延びている。本調査地点の東北東100mの呉服町交差点が最も高く、その東100mではまた、落ちていっている。したがって、本調査地点は南へわずかに傾斜している。

本調査地点での遺構検出面は、標高1.2m前後であるが、その上はレンガ、コンクリート基礎材、瓦などが混入した暗褐色砂質土で近世から現代の整地層で、近世初期までの面は検出

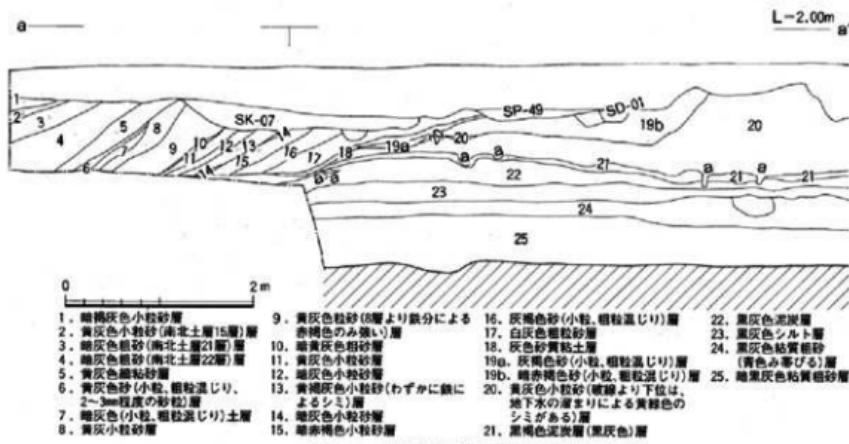
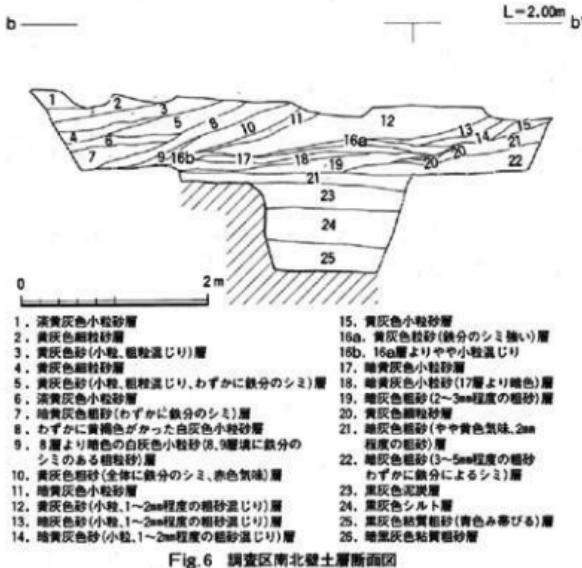


Fig. 5 調査区東西壁土層断面図

できず、現代に近い時期の整地層と考えられる。遺構検出面は、調査区を中央で南北に切って、西半分強がほぼ平坦な堆積状態をもつ黄灰色砂層を基盤とし、東半分は、東へ傾斜をもつ淡～暗黄灰色粗砂～細砂の互層を基盤とし、同面では近世の遺構がわずかに残っているほかは、中世後半期の遺構が



検出できた。南北壁 (b-b') の 1~22 層、東西壁 (a-a') の 1~20 層は、数点の土師器片と青磁片が出土したのみで無遺物層といつても過言ではない。人為的な埋土とも考えられたが、下山正一氏によると水性の自然堆積と教示を得た。その下の黒褐色～黒灰色泥炭層・黒灰色シルト・黒灰色粗砂層は、平坦な水平層をもっている。黒褐色泥炭層は調査区を覆っているが、黒灰色泥炭層から暗黒灰色粗砂層は、調査区の南側に分布している。その下は茶色を帯びた赤褐色の粗砂で、調査区中央で直に落ちている。人為的掘削で黒灰色泥炭層から黒灰色粗砂層は覆土か。黒灰色泥炭層～粗砂層は11世紀後半から12世紀初の遺物を包含している。なお、

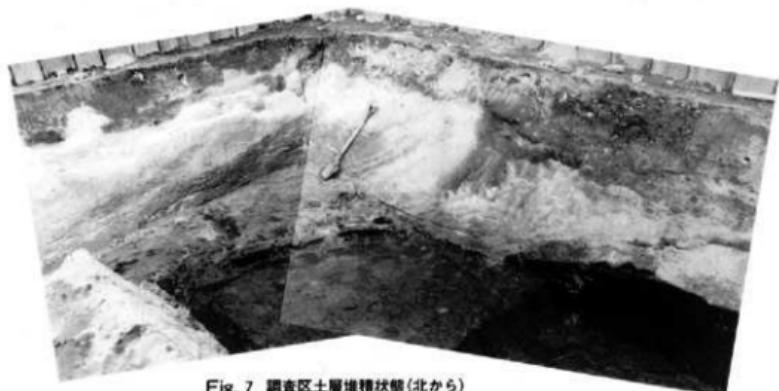


Fig. 7 調査区土層堆積状態 (北から)

湧水は黒灰色泥炭層中（標高50cm）で始まった。

本調査地点の「明治屋第一生命共同ビル新築に伴う地質調査」によると、黒灰色粗砂層までが埋土となっており、その下は黄色粗粒砂・暗灰色微細砂・褐色シルト質砂・暗灰色シルト～砂まじりシルト～シルト混じり砂・灰色粗粒砂・黄灰色～黄褐色砂礫が基盤岩（標高-22.7m）の上に堆積している。基盤岩は上から黄褐色風化砂岩・黄灰色風化砂質頁岩・青灰色砂質頁岩・褐色風化砂質頁岩・青灰色砂質頁岩（標高-29.9m）となっている。

3. 遺構と出土遺物

1) 土壙

SK-05 (Fig. 9-12)

本土壙は、調査区のほぼ中央部に位置し、SK-06・13を切っている。長径1.2m、短径98cmの楕円形の平面プランをもち、床面は皿状をなしているが、壁は角度をもって立ち上がっており、30cm前後の遺存である。遺物は検出面で扁平角碟に混じって出土した。

出土遺物 1・3～5・7は土師器壙である。すべて糸切りであり、5の外底には板状圧痕がみとめられるが、他にはなく、内底中心にも同心円状のナデ痕がある。また、1-7および5では底部と体部の境が明瞭である。口径では、1はこのなかでは最小で10.4cm、他は11.2～12.4cmの範囲にある。11・12は土師器の小形高壙である。口径8cm前後の小皿に脚部を接合したもので、脚部に凹凸の強いヨコナデがみられる。

8は白磁壙で、平底の部分は露胎で白灰色となっているが、その他の器体には黄緑色を薄く帯びた白磁釉がかけられ、全面にこまかい氷裂文が出ている。

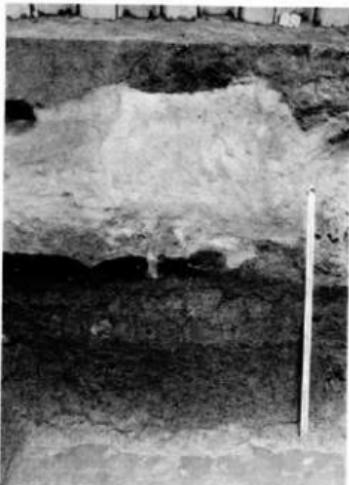


Fig. 8 調査区土壙堆積状態(東から)

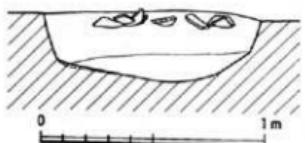


Fig. 9 第5号土壙(SK-05)実測図

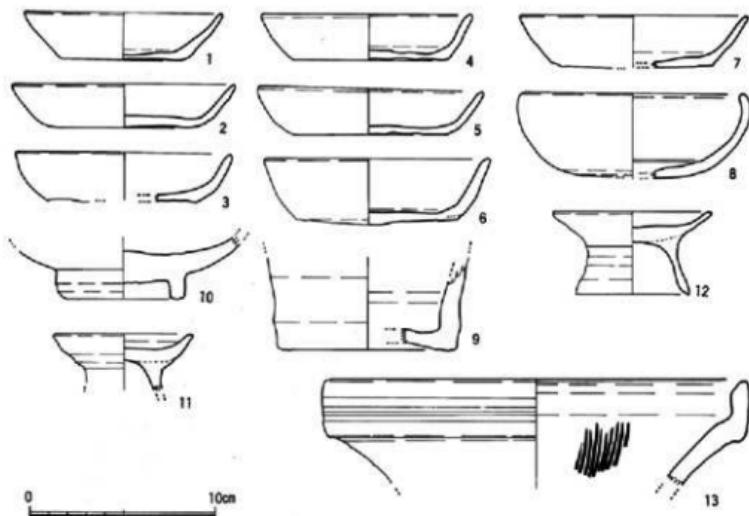


Fig. 10 第5号土壤(SK-05)出土遺物実測図

さらに内底には、目跡(6×2mmの長円形)があり、内清した形を呈する出土例の少い白磁である。9は黒釉長盃の底部小片で、外底を含めて黒色釉がかけられ、内側にも茶黒色釉がかけられている。外底には砂が輪状(幅約1cm)に付着している。10は青磁碗ないし鉢形のやや大形品である。緑色の釉は内底中央部を露胎とし、赤褐色の土が露出し、外面は高台疊付までかけられ、内側は無釉である。腰のやや張った形になるとみられ、明代竜泉窯製品である。13は備前焼の描鉢で、立ち上がる口縁帯に2~3条の沈線をめぐらし、内側の描目は10本1単位である。16世紀代の製品と考える。

以上の出土遺物から本土壤は、15世紀から16世紀のもので、16世紀後半までは下らない。つぎの2点は、本土壤の上部から採集したもので本造構のものと考えられる。

採集遺物 土師器坏の2~6を採集している。2の底部は二重に貼付されているようで、現状の底の内部に糸切り痕の一部がみえる。板状压痕ではなく、内底中心部も

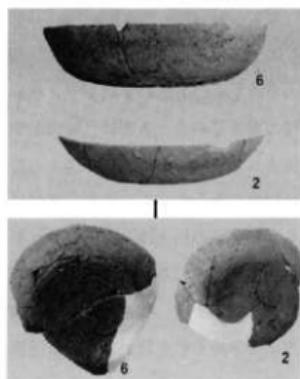


Fig. 11 第5号土壤出土土器(1)

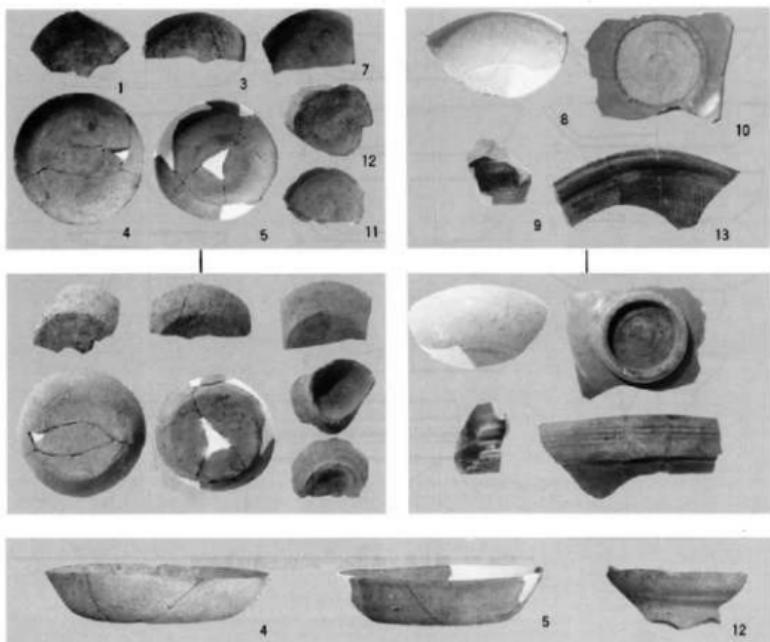


Fig.12 第5号土壙出土遺物(2)

ヨコナデである。6も同様な調整をみせ、内底中心に同心円のナデ痕をのこしている。

SK-06 (Fig. 13~Fig. 18)

本土壙は、SK-07・13を切り、SK-05・SP-040に切られている。長軸1.6m、短軸1.5mの丸みをもつ方形の平面プランをもち、床面はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がり、22cm前後の遺存である。遺物は、検出面から床面までむらなく出土した。SK-05では、遺物は疊に挟まれた状態で土師器壙が出土した。SK-07では、土師器壙・小皿の完形品が重ねたセット状態で出土している。SK-06では、SK-05・07での土師器壙・小皿の出土のあり方と異なり、完形品の出土ではなく、いずれも破片で出土した。

出土遺物 糸切り底の土師器壙aのうち実測可能な20個体のうち、16~20は外底に板状圧痕をもち、内底はナデ、体部はヨコナデ調整をしている。これ以外の壙のうち小片のため底部の残存部が小さいものを除いて、板状圧痕がないものが多く、それらは体部から内底中心までヨコナデ調整である。さらにこれらに共通するのは、底部から0.8cm位の部分を強くヨコナデするこ

とによって凹み、縁がついていることである。法量においても、口径11.5~12.8cmにおさまり、ほぼ同大である。確実に板状圧痕のみとめられないものは、1~3・7・8・10~14・17である。

共伴の陶磁器は少く、21・22は竜泉窯青磁皿で、淡緑色の透明釉が内外にかけられている。23は青磁盤で、水製文をもつ透明釉が平滑にかけられている。これらは明代の青磁であり、およそ15~16世紀と考えられ、本土壙の年代と推定したい。

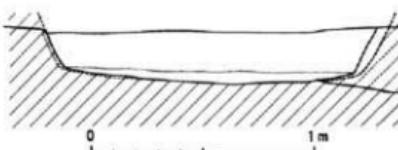
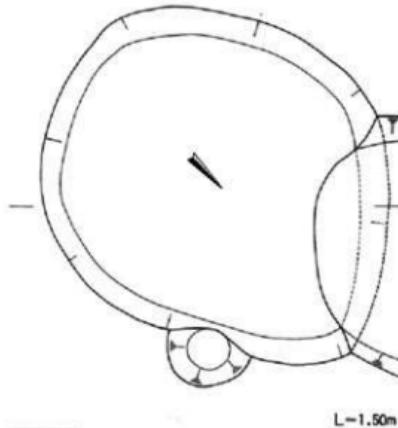


Fig. 13 第6号土壙(SK-06)実測図

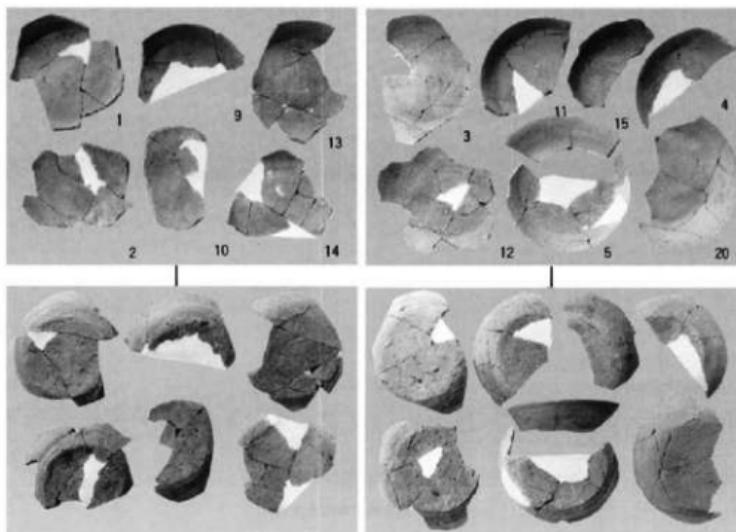


Fig. 14 第6号土壙出土土器(1)

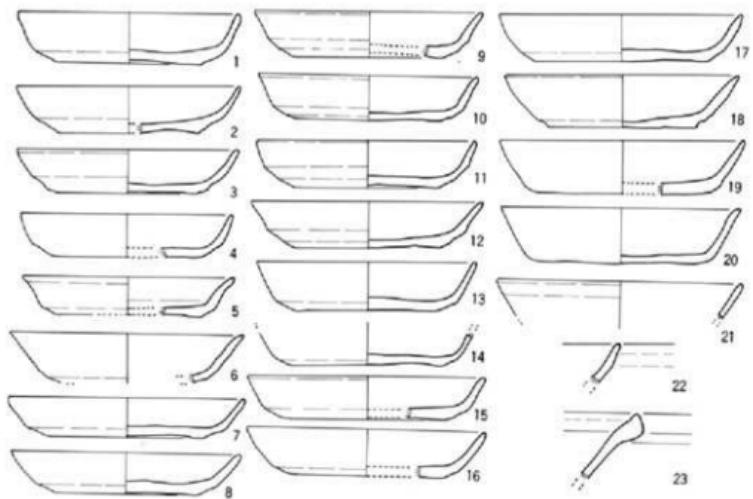


Fig. 15 第6号土器出土土器实测图(1/3)

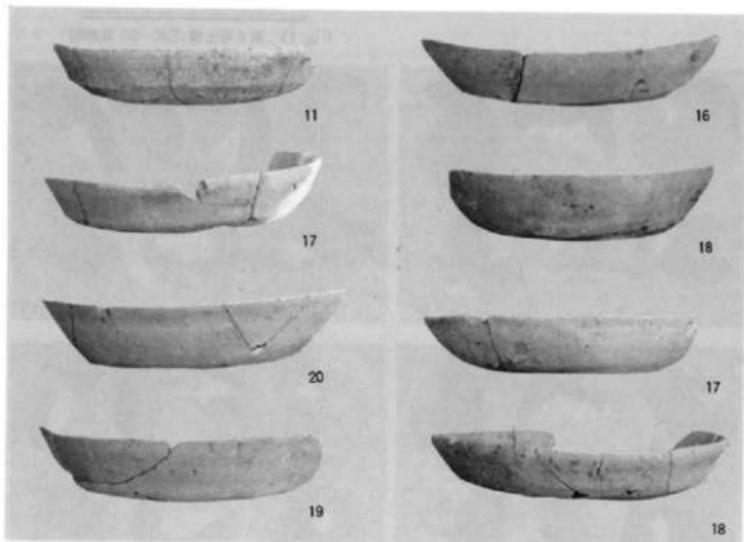


Fig. 16 第6号土器出土土器(2)

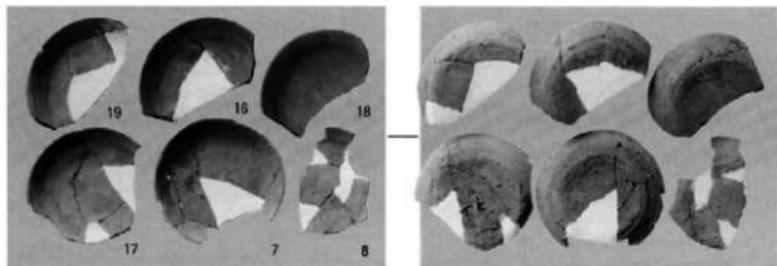


Fig.17 第6号土壤出土土器(3)

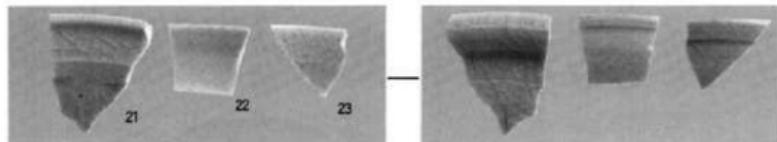


Fig.18 第6号土壤出土青磁

SK-07 (Fig.19~22)

本土壤は、調査区のほぼ中央部の南壁附近に位置し、柱穴を切り、SK-06・SP-039などの柱穴に切られている。南壁にかかっているが長軸2.5m、短軸1.7mの丸みをもった長方形の平面プランをもち、床面は皿状をなし、壁は緩やかに立ち上がっており、30cm前後の遺存である。遺物は検出面から20cm前後までの間に、焼けて煤が付着した状態の花崗岩などを含む角礫に混じって出土した。しかし、遺物は火を受けてなく、小皿は6枚・7枚重ねで出土し、壺は5枚・4枚と重ねた状態で出土した。

出土遺物 土師器小皿と壺をまとめて出土した。これらはすべて糸切り底であり、26が赤褐色を呈する他は褐色である。小皿は同形同大といってよく、口径は6.2~7.0cm、高さは1.5cm前後である。底部には板状圧痕が全くみとめられず、内底までヨコナデ調整され中心部にも同心円のナデ痕がみられ、その上から指頭を抜き出したような圧痕がほとんど例外なくみとめられる。これは壺にも共通してみられ、23では指頭大に深く凹み、周辺はナデ痕のようにもみえるが、ヨコナデ痕の上についている。17・23・26には板状圧痕がみとめられ、内底はナデ調整である。17は体部が直線的にのびる形で、他のものと異なる。表採の壺27は26と同じ色調の胎土であり、これには板状圧痕がある。このように一部に混在はあるものの、この土壤出土の土師器皿、壺とともに糸切りで板状圧痕をもたない技法上の共通性をもっている。28は瓦質火鉢の底部で、外面は器面が平滑に磨かれ、黒色を呈する。内面はハケ目とヨコナデ調整が底面まで施され、指紋も付いている。中世後半期の所産であろう。

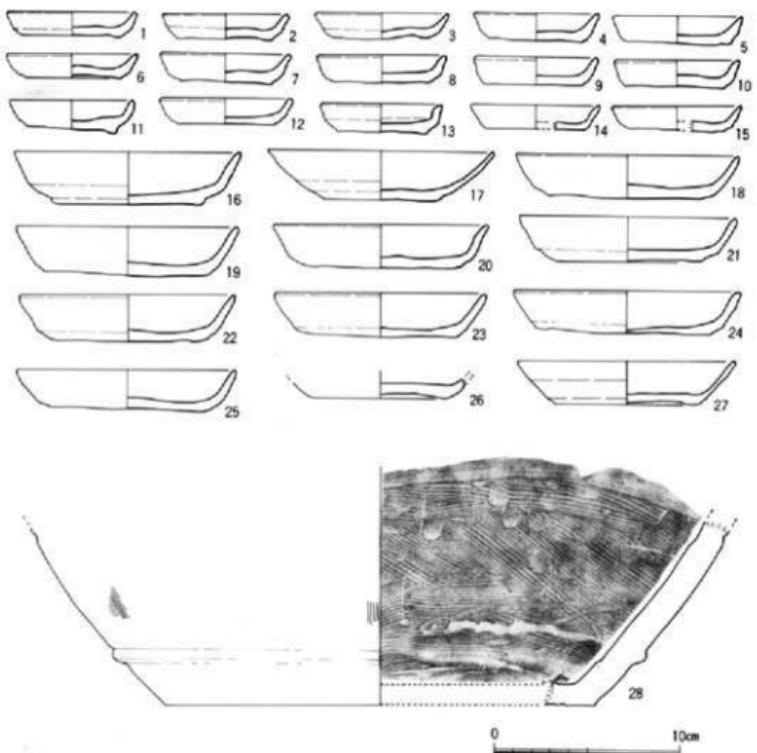


Fig. 19 第7号土壤出土遺物実測図

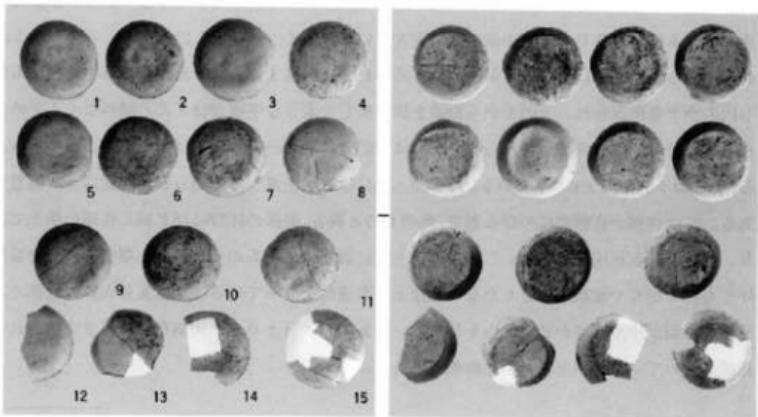


Fig. 20 第7号土壤出土土器(1)

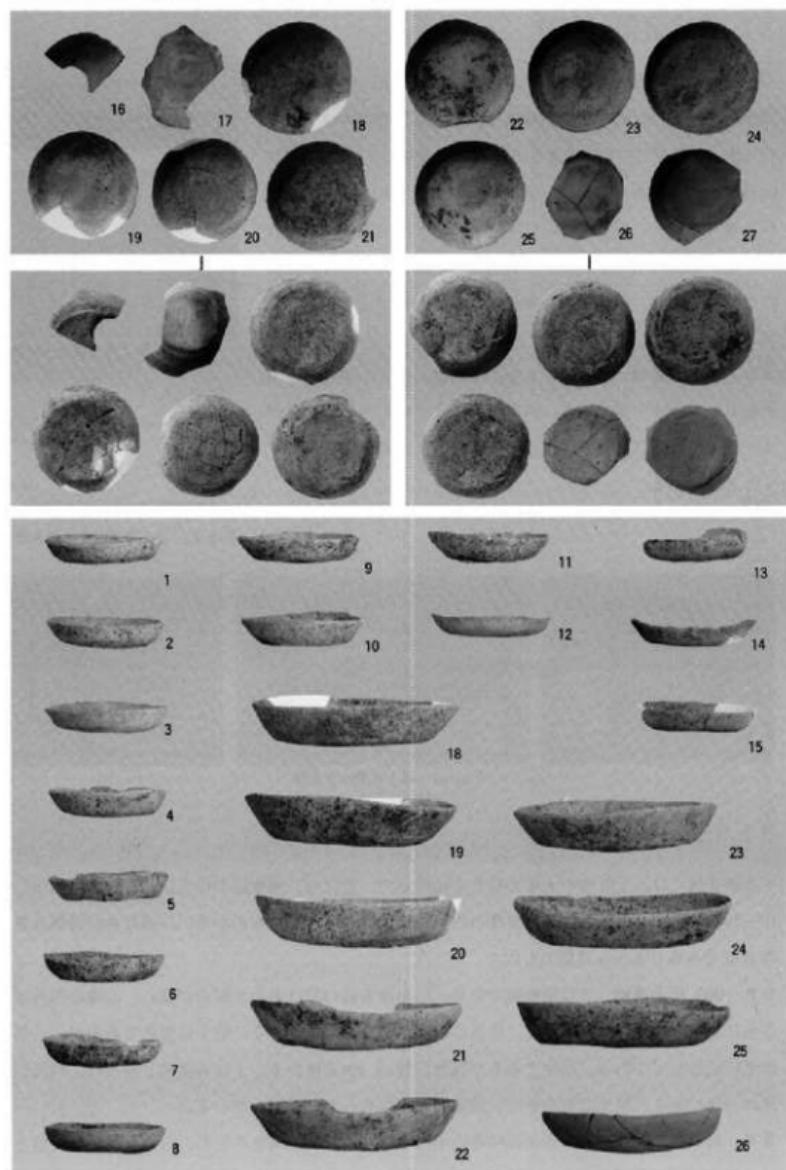


Fig. 21 第7号土壤出土土器(2)

2) 溝状遺構 (SD)

本調査地点では、ほぼ平行する溝を3条（SK-09も溝か）検出した。SD-01は幅40cm前後でN-46.5°-Eの方位を取り、南西方向に延びているU字溝で、SK-11・12を切っている。深さ16cm前後の遺存である。SD-08は幅85cm前後でN-45°-Eの方位を取り直線的に延びているU字溝で、すべての遺構に切られている。25cmの遺存である。第40次検出の溝と120m離れてほぼ平行しており、道路側溝と考えられるが遺物がなく、時期が限定できない。

SD-01出土遺物 土師器壺aを1点検出した。糸切りで、内外面ともヨコナデ調整をし、内底中心部まで同心円のナデ痕がよく残り、外底には板状圧痕はみられない。法量は11.8-7.7-2.8cmである。



Fig. 22 第7号土壤出土火鉢

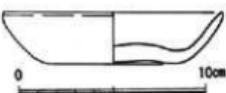


Fig. 23 第1号溝出土土器実測図

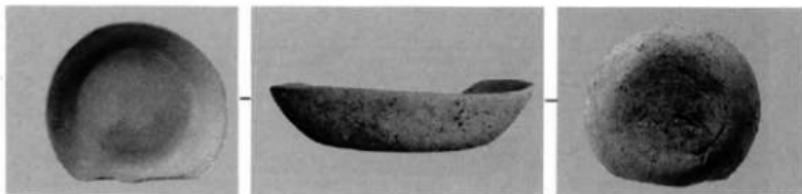


Fig. 24 第1号溝出土土器

3) 柱穴(SP)

本調査区では、140個の大小の柱穴を検出した。柱穴は、調査区の中央部から東側に集中し、10~40cmの遺存をもち、径40cm前後の円形の平面プランをもつものが多い。切り合い関係と遺存状態でみると4・5時期のものか。

SP-009 出土遺物 2は黒釉碗であり、いわゆる匙口ではあるが屈曲が鈍い。口縁の内外は茶色に発色し、その下は黒色で、外面には灰色の斑点がみられる。胎土は褐色であるが、一部は黒灰色となっている。小片であるが復元口径10.4cmをはかる。1は青磁碗とみられ、外反口縁の一部である。胎土は灰白色で、淡緑色釉がなめらかに融解している。

SP-033 出土遺物 3の須恵器壺身の小片1を検出した。灰色を呈し、白い小粒を含む胎土で、焼成はやや軟質である。7世紀前半。

S P - 035 出土遺物 4の須恵器の小形高杯を検出した。残存する脚部は暗灰色を呈し、脚部には自然釉状の降灰がみられる。脚内に細い刻線で、ジグザグ文が記されている。胎土は黄色の小粒を含み、やや粗土であり、調整はヨコナデを主とし、杯底はナデである。7世紀前半の時期と考える。

S P - 046 出土遺物 5の須恵器鉢の小片が出土している。暗灰色で、口縁を断面三角形にする。胎土中に白い粒子を含んでいる。

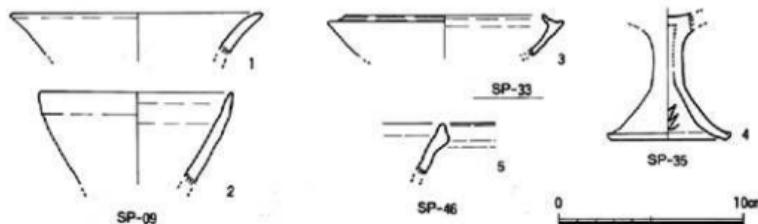


Fig. 25 柱穴出土遺物実測図

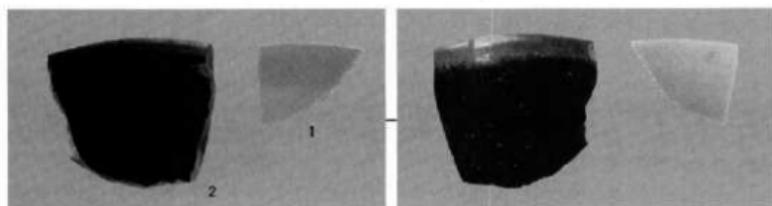


Fig. 26 第9号柱穴出土遺物

4. 包含層出土遺物

1) 第1面検出時採集遺物

須恵器から近世肥前陶器まで混在した状態で遺物の出土がみられる。1~12は土師器で、すべて糸切り底である。小皿はすべて外底に板状圧痕をもたない。4は底部中央と体部に各1孔が焼成後穿孔され、内底の中央に平坦面をつくり、やや異質の形で、特別な使用目的のためにつくられたものであろう。杯では6・10のように平底から直線的に体部を延ばす形がある。9~11には板状圧痕が外底部にみられる。13は土師器の脚台付皿かとみられる器形で、赤褐色を呈す

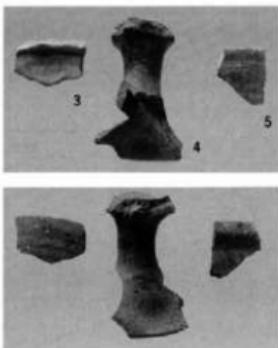


Fig. 27 柱穴出土遺物

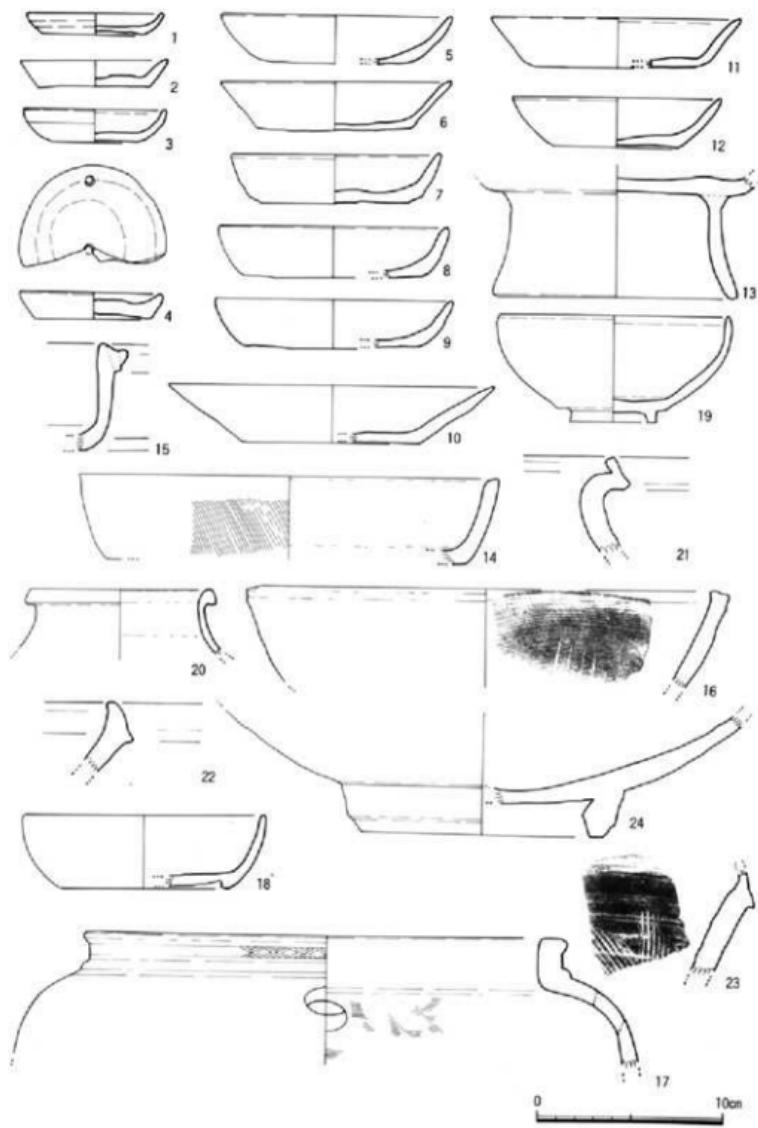


Fig. 28 第1面検出時採集遺物実測図

る脚台部が残っている。14・15も土師質で、14は皿、15は口縁部を焼成前に穿孔し、鍋かとみられる小片である。16は土師質の擂鉢である。17は瓦質の火鉢で、直立する口縁部に連続四菱文を印花し、外面は黒色に磨かれ、内面は刷毛の上からナデないショコナデ調整され、灰色を呈する。18は竜泉窯青磁碗で基底の中央部分は露胎で灰褐色を呈し、他は灰緑色に発色し、明

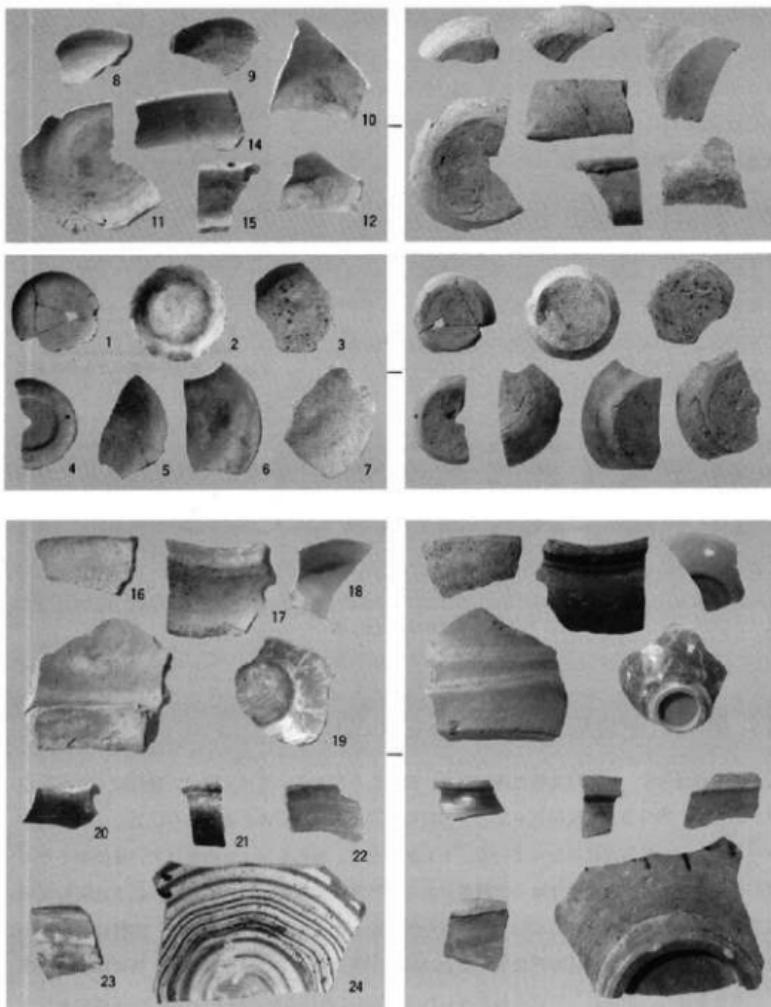


Fig. 29 第1面検出時採集土器1)

代の青磁である。19は国産近世陶磁で、釉調が盃ら状にみえているが、淡褐色ないし灰色土に白化粧をし、透明釉がかけられている。しかし白化粧が流れ落ち、内底などでは白色に近い発色を示すが、他の部分は白化粧が盃らになり、透明釉がかかったため、灰色の胎土がそのままみえている。20は中国製の鉄釉壺の口縁部で、黒灰色土に鉄釉がかけられている。21は須恵器。22と23は炻器の鉢である。24は唐津焼大皿で、内面には白刷け目により彩色され、端部に鉄絵の一部がみえる。武雄唐津焼に類似している。

2) 黄灰色砂層出土遺物 (Fig. 31・32)

土師器壺aを1点検出している。外底は磨滅しているが糸切り痕が微かにみえ、板状圧痕はない。体部はヨコナデで、内底までおよんでいる。底部と体部の境界が明瞭である。

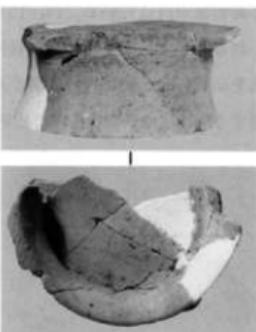


Fig. 30 第1面検出時採集土器(2)

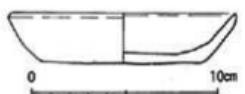


Fig. 31 黄灰色砂層出土土器実測図

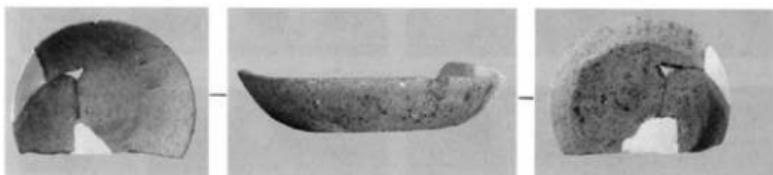


Fig. 32 黄灰色砂層出土土器

3) 黑灰色泥炭層出土遺物 (Fig. 33~42)

3は土師器壺で、底部は丸底氣味であり、褐灰色を呈する。2は瓦器で、底径は4.0cmと小形であるが、内外面とも灰黒色を呈し、内底にミガキの太線がみえる。高台は低く、疊付幅が3~7mmと三日月高台状になっている。1も瓦器壺で、黒色を呈する内面は太い単位のミガキ痕が少しみられるが、大部分はナデ調整である。外面は口縁部が黒色で、それ以下は灰色を呈し、中位までミガキがなされている。4は中国陶磁とみられる壺の口縁部で、内外に暗緑色の透明釉がかけられ、胎土は赤茶色で、小さい白点が混ざる。5は須恵器鉢で、外面は凹凸が多く、黒色を呈し、中位以下に刷毛目がみられる。内面は斜目方向の刷毛目がみえ、灰褐色を呈する。6は滑石製品で、円孔から半裁されている。左縁の斜線は加工痕である。

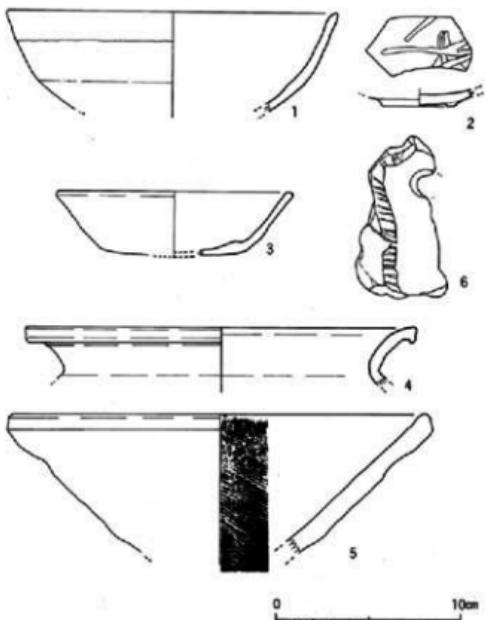


Fig. 33 黒灰色泥炭層出土遺物実測図

本層は10~25cmの厚さをもち湧水がこの層から始まり、泥炭層であるため木器が出土した。出土木器には、什器類・草履・玩具・建築部材・板材・加工材・加工屑・削り屑・杭・その他の木製品がある。什器類の中では、箸がもっとも多く、25点出土した(Fig. 36~9~33)。9~11・13~15・20~22・24~27・29・32・33がスギ、12がヒノキ?、31がモミを用いている。35~36・39は曲物の小片で、36・39は底板で後者は火を受

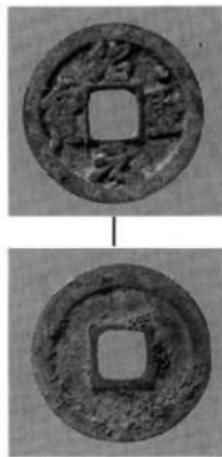


Fig. 34 黒灰色泥炭層出土銅錢

本層の上面から1094年鑄造の銅錢「紹聖元寶」1枚が出土した(Fig. 34)。

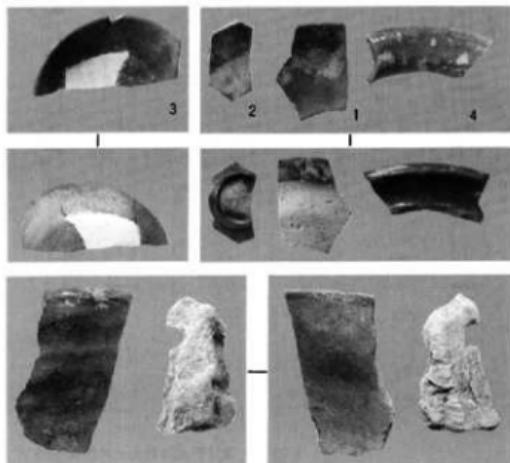


Fig. 35 黒灰色泥炭層出土土器

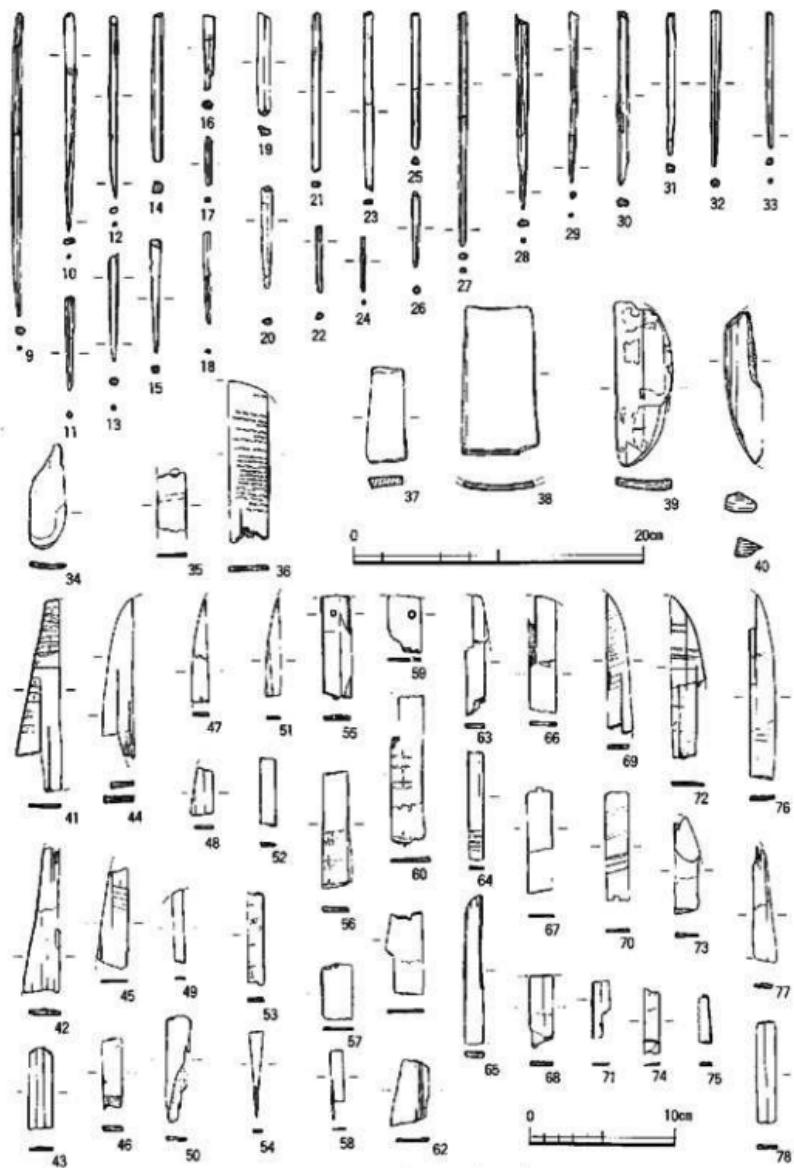


Fig. 36 黑灰色泥炭层出土木器实测图(1)

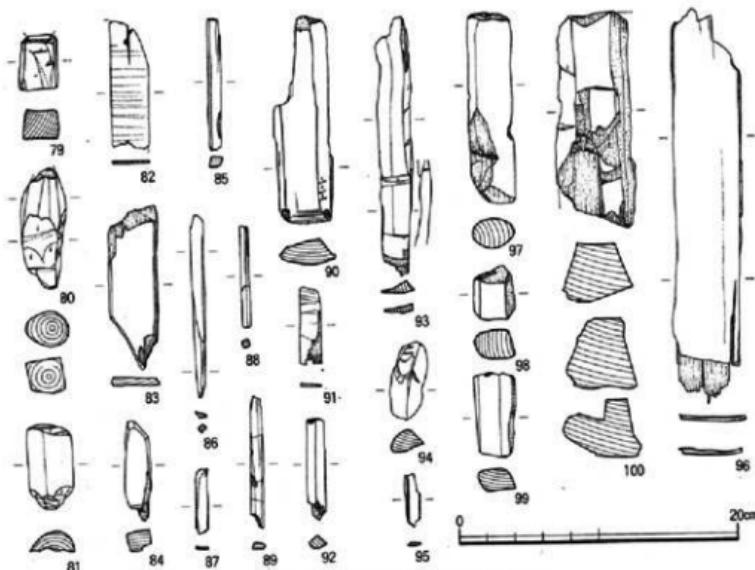


Fig. 37 黒灰色泥炭層出土木器実測図(2)

け赤化している。36はヒノキ？、他はスギの板目取り材を用いた桶板。81は桶の栓か。34は杓文字、40はスギの板目取り材を用いた鍋蓋か。41～78は板草履の破片と考えられる。いずれも厚さ3mm前後で、41は器長13cmで端部をL字状に切り取っており、足中か。いずれも同一樹種の板目（例外もある）取り材を用いている。79はカシの削材を用いて直方体をなし、上端に頭部があったと考えられるが欠失している。木偶か。97～99はカシを用いた棒材。100は建築部材。95～163は板材で、101～124がスギ、151～155がモミ、156・157がヒノキ？、158・159がマツ？、160が竹を用材としている。164～172が加工材と加工屑、173～200が削り屑である。201～206は杭、207～210は削材である。80はカシを用いた縛鍵か。82・83・85・88・92・164・167・170・171・173～179はスギ、86・90・96・184～193はヒノキ？、91はモミ、94・181・204・



Fig. 38 調査区土層堆積状態(北から)



Fig. 39 黑灰色泥炭层出土木器实测图(3)

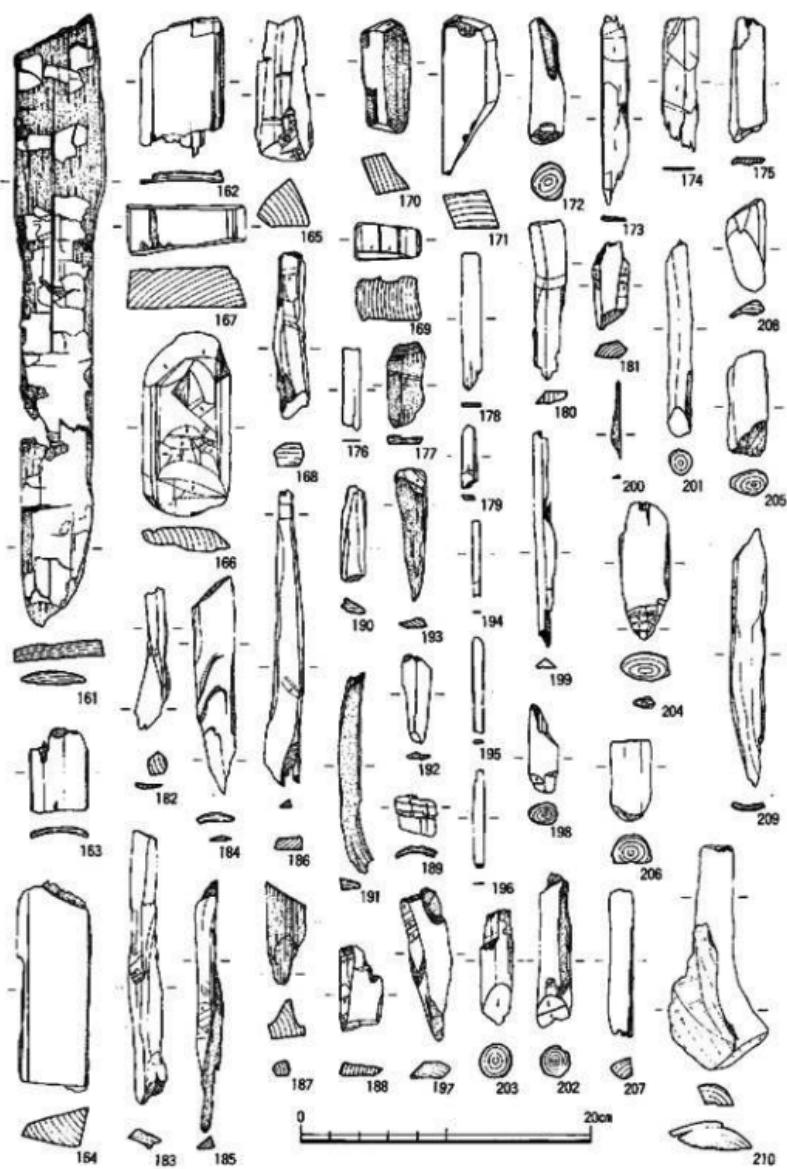


Fig. 40 黑灰色泥质层出土木器共40

205・207はシイ、93・100・180はマツを用いている。

本層からは、以上の人造物のほかに人骨や馬の歯、獣の頭骨、鯨（またはイルカ）の脊椎などの獣骨、梅などの種子など自然遺物（Fig. 41・42）が出土した。人骨については、中橋孝博氏に分析をお願いし、第4章に収録した。なお、獣骨については今後分析を依頼し、報告する。

以上の年代決定に資する明確な遺物は少ないが、出土土器・北宋錢の出土から黒灰色泥炭層は、11世紀末から12世紀の第1四半期頃の堆積層と考えられる。

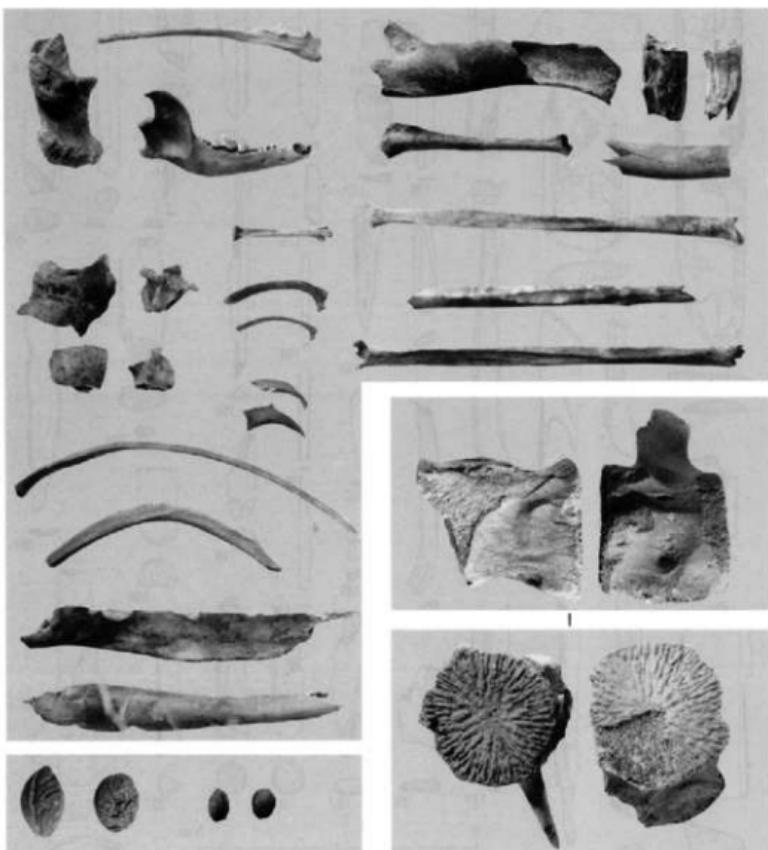


Fig. 41 黒灰色泥炭層出土獣骨および種子

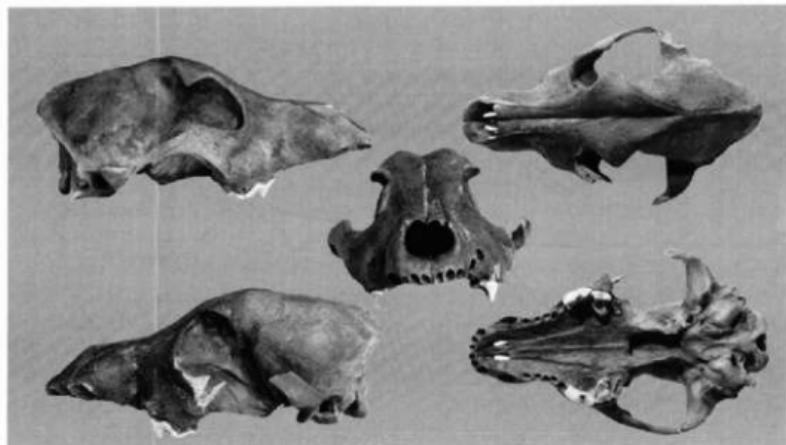


Fig. 42 黒灰色泥炭層出土獸骨

4) 黒灰色粗砂層出土遺物 (Fig. 43~45)

9~13は白磁であり、この他に青磁は1点の出土もみない。12は中形の玉縁口縁をもち、不透明で灰白色の釉がかけられ、釉面にピンホールが多くみられる。9・11はその底部で、11では内底に圓線がめぐらされている。10の底部は内底に釉を輪状に搔きとるもので、その部分に炭化物が付着する。胎土釉調とともに9・11と同じで、ざっくりとした胎土である。13は細い水裂文を内外全面にみせる白色透明釉がかかり、胎土は灰白色である。高台をもつ浅い器形と考えられ、内底は圓線をもって体部と境をしている。3は土師器の小皿で、口縁の内側に一線をめぐらしている。胎土は白灰色で、磨滅が多く調整は不明である。8は焼成不良の須恵器皿とみられ、白灰色を呈する。体部はヨコナデで、底部中央に板状圧痕がみられ、胎土は細い精製土である。9世紀代の製品であろう。1・2は土師器で、2はヘラ切り底の坏である。淡褐色を呈し、体部の内外はヨコナデ調整である。1は丸底坏で、内面にいわゆるコテ痕がみられ、外体部は上半がヨコナデ、下半には指頭痕がみとめられる。4~7は瓦器である。7のみ皿で、内体部の一部に磨きの痕跡がみとめられるが、内外ともにヨコナデないしナデ調整である。灰黒色を呈し、胎土は灰色、瓦質である。なお、内面に黄色の付着物がみられる。5と6は在地の瓦器塊とみられ、ともに内外面にヘラ磨き痕がみられる。5は外体部中位から下位に指頭によるとみられる凹凸があるが、その上から斜め方向の磨きがされている。内外ともに黒色を呈する。4は、いわゆる楠葉型の瓦器塊である。口縁内側に一条の圓線をめぐらし、横位に、細い

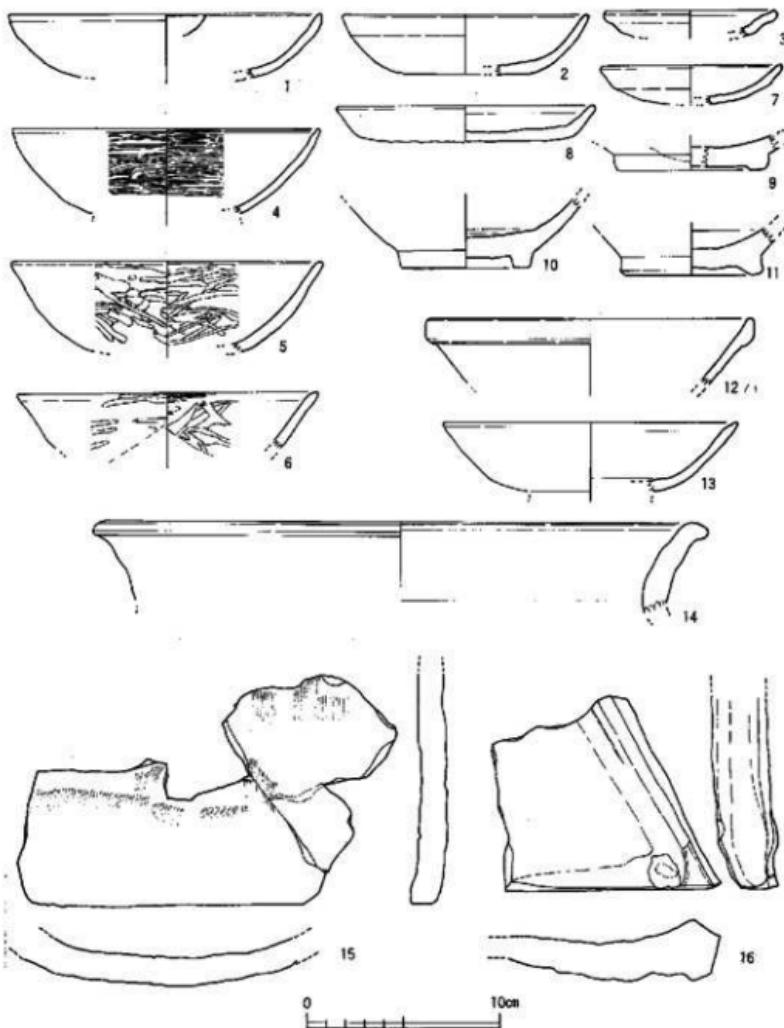


Fig. 43 黒灰色粗砂層出土物実測図

磨きのヘラが動いている。外面は、口縁より 1cm の部分は内面と同じ調整であるが、それ以下は凹凸の上に、やや間隔をあけてはいるが、細い磨きが横位にされている。残存部の下端にヨコナデがみとめられ、高台の付近で欠損していると考える。この他に、14は土師器甕で、胎土中

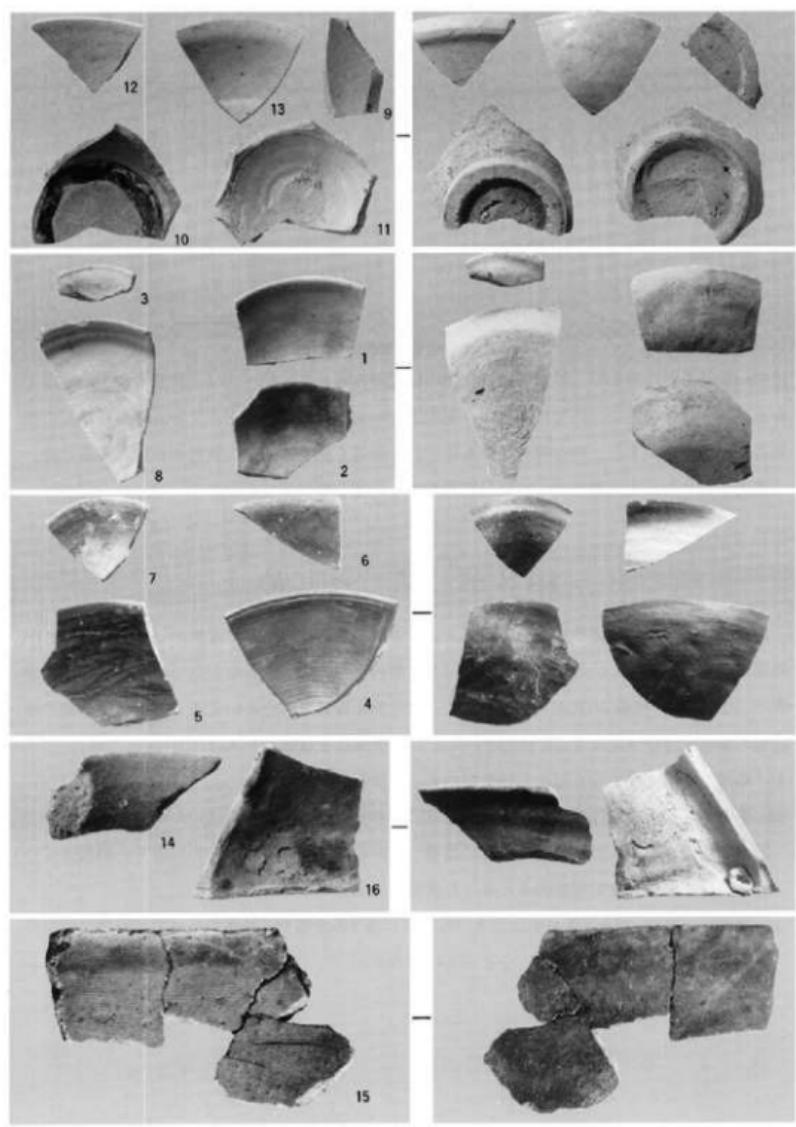


Fig. 44 黑灰色粗砂層出土遺物

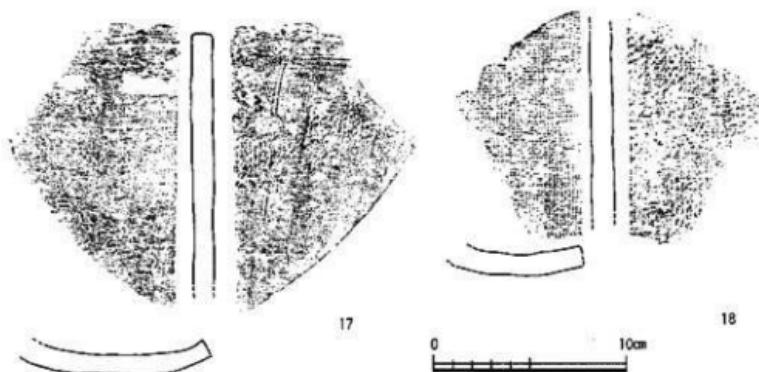


Fig. 45 黒灰色粗砂層出土平瓦拓影

に白い粒子を含む粗胎で、外面には炭化物の付着がみられる。15・16は土師質カマドの残片である。17・18は平瓦で、17では縄目叩打文の上に不定方向の刷毛目がみえる。厚さは薄く、須恵器質で灰白色を呈する。18も縄目文であり、17と同じく桶巻き造りの痕跡が側縁にみられる。

黒灰色粗砂層は出土遺物から11世紀後半を中心とする堆積層である。

第3章 まとめ

本調査地点は、2つの砂丘とその間に所在する博多遺跡群のなかで海側の「息の浜砂丘」の内陸側の谷部に位置している。第29・49次と2ヶ所の谷部の調査が行なわれていたが、今回の調査で、中世都市「博多」の拡がりを考えるうえで貴重な資料を得たといえるとともに、今後の周辺地の調査を行なう足掛かりを得たといえよう。調査成果と課題点をあげておく。

1. 標高1.2m前後で14世紀から16世紀の生活遺構が確認できたこと。
2. 標高0.5mで赤褐色粗砂層が約1m急激に落ちているが調査区が狭いため人為的なものか否か確認できなかったが、段落ち部に堆積している黒灰色泥炭層から粗砂層で、磨耗していない11世紀から12世紀初頭のまとまった遺物が出土したこと。
3. 課題としては、第8号溝が中世博多の町割りに関するか否か、谷部の利用開始時期はいつごろか、生活遺構の出現時期は、などがあげられる。

第4章 博多遺跡群第58次調査出土中世人骨

中橋孝博

九州大学医学部解剖学第2講座

はじめに

商都、あるいは港町として長い歴史を持つ博多では、近年、種々の都市開発事業に伴う発掘作業によって、少ながら中世、近世所属の人骨資料が蓄積されつつある。その中で博多の中世人には、長頭性や齒槽性突頭といった、従来より知られている中世人の時代特性と同時に、他では稀な高頭性の強い個体例の存在が報告され（中橋、1989）、その都市生活との関連から、近世期における急激な形態変化の要因を探る一つのモデルケースとして注目されている。

1989年秋に実施された博多遺跡群第58次調査によって、また新たに人骨資料が出土した。僅かに下顎1個ではあるが、興味深い所見も見られたので、以下にその結果を報告する。

遺跡・資料

出土状況 博多遺跡群第58次発掘調査は、1989年10月、福岡市博多区網場町（20-21 1、2番地）で実施され、地表下、約3.7mの黒色砂層上層より、下顎骨1個が出土した。墓壙は検出不能で、副葬品も見あたらず、周囲の伴出遺物の性格などからみて、この下顎骨は何処かより流れこんだ遺体の一部とみなされる。

所属時代 おもに層序関係と各包含遺物に関する考古学的考察から、11世紀末所属のものと考えられている。

遺存状況 下顎骨の遺存状況はかなり良好であるが、上記のような状況のため、歯の多くは脱落、欠損している（図版参照）。下顎以外の人骨片は検出されなかった。

性別・年齢 全体的にかなり大きく頑丈な外観を呈し、歯のサイズもかなり大きく、筋付着部の発達も強いことなどから、男性の可能性が強い。年齢については歯の咬耗が2度に達していることから、熟年に達した個体と推察される。

計測・観察結果

下顎角咬筋粗面、翼突筋粗面、筋突起、オトガイ結節、頸舌骨筋線部等、いずれも発達が良好で、下顎角部は外反している。また明瞭な角前切痕が認められる。なお、後述するように、筋突起外側部には、最大径3cm大の不整な骨増殖が見られる（図版参照）。

計測値とその比較結果を表1に示した。

表1 下頸計測値の比較（男性）

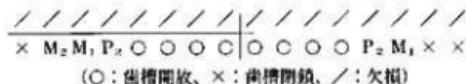
項 目	博 多 (中世)	58	吉 母 (中世)	1) 浜		2) 材		3) 木		4) 座		5) 北都 (弥生)		3) 土井ヶ浜 (弥生)		4) 津 (繩文)		5) 雲 (現代)	
				N	M	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M
65.	下顎小頭幅	(130)	18	122.7	21	123.0	49	132.9	43	131.4	11	129.6	85	123.7					
66.	下顎角幅	106	19	102.8	39	98.6	33	108.4	48	108.6	17	105.4	86	97.1					
68.	下顎長	76	19	73.3	47	76.4	44	75.1	44	75.8	15	75.0	86	65.2					
69.	オトガイ高	—	16	32.1	52	32.7	89	35.7	41	34.3	15	33.5	85	35.6					
70.	下顎枝高(左)	69	15	59.9	46	59.7	26	64.5	39	63.2	12	62.3	87	59.6					
71.	下顎枝幅(左)	35	19	35.9	52	36.6	46	37.4	50	36.6	18	33.7	87	34.7					
71/70	下顎枝示数(左)	50.7	15	61.2	45	61.3	25	59.7	36	58.0	12	54.0	86	58.5					
79.	下顎枝角	122	19	121.2	46	121.2	51	120.8	39	122.9	14	121.6	86	128.3					

1)中横・永井(1985)、2)鈴木(1956)、3)中横・永井(1989)、4)清野・宮本(1925)、5)原田(1954)

得られた諸径の多くは、比較群の平均値を上回っており、上述のようにサイズ的にかなり大きな下顎である。例えば小頭幅や下顎角幅は他の中世人男性と大差を見せ、むしろより古い弥生人や縄文人の値に近い。下顎長も他群と遜色ないので、大頭の持ち主か、もしくは中、短頭に傾く脳頭蓋の男性であった可能性が窺える。また中世人下顎は下顎枝が比較的頑丈でその示数がかなり大きいことが一つの特徴になっているが、本例は下顎枝高の大きさが目立つのにに対して、枝幅がさほどでもなく、その示数は吉母浜等、他の中世人はもとより、比較群のいずれよりも小さい。

全体的にみて、他の中世人下顎との比較において、明確な類似性は認められず、後述の特記所見と共に、やや特異な一例となっている。

以下に歯式を示す。



歯は僅かに5本を残すのみで、他は脱落によって失われている。右第2大臼歯、及び左第1大臼歯にはう蝕（虫歯）が見られる。

また、歯冠表面に黒色の色素付着が認められた。特に隣接歯に面した近、遠心側面に濃く、また、歯冠の頬舌側面ではかなり薄くて、その歯頭部に近づくに従って濃くなっていく。他の骨表面の色、あるいは出土層の土色とも明かに異なり、土壤鉄分の沈着による変化とも考えられるが、その付着状況からみて、いわゆるおはぐろ（鉄漿）の可能性も否定し得ない。残存歯が少ないとあって確定は困難であり、類例の出土を待ちたい。

特記所見

本下顎では図版にも明らかなように、左筋突起外側部に径及び長さとも約1cmの首部を介して前後方向の最大長36mm、上下最大幅12mm、最大厚10mmの骨塊の付着が認められた。外側面、およ

び首部下半の骨表面はかなり平滑で、下縁は鋭い稜線をなしていること、及びその位置が頬骨弓部の直下にあたり、丁度、咬筋の走行域に位置していることから、左下顎角からの咬筋はこの突起を下から包み込むようにして頬骨へ伸びていたと推察される。また、骨増殖部上面はかなり厚みのある不整な粗面となって前下方へと傾斜しており、この上面の所見から、何等かの筋が付着していた可能性が考えられるが、左筋突起の大きさ、位置、突起の角度等に右側とは差異が見られないので、上記のようなその位置関係から判断して、咬筋の一部が付着していたことも考えられる。右下顎角が強く外反しているのに対して、左側は粗面の発達が比較的弱いことも、そうした可能性を示唆しているように思われる。

こうした骨増殖の原因として、頭蓋の顔面部などに発生する良性腫瘍である骨腫 osteoma や、軟骨由来の外軟骨腫 ecchondroma 、あるいはまた、何等かの外傷に起因する外骨腫 exostosis 等が一応考えられるが、他の体部骨が存在しないこともあって、正確な診断はなし難い。いずれにしてもきわめて稀な一例と考えられる。

総括・考察

1989年秋の博多遺跡群第58次調査によって、平安時代（11世紀末）所属の下顎骨1個が出土した。諸筋の発達が良好なことを窺わせる、かなり大サイズの下顎であり、歯の咬耗状況から、熟年男性のものと推察される。

形態的にみて、吉母浜や材木座の中世人とのあいだに、これといった類似性は見いだし難い。特に下顎枝の高さ、小頭幅の広さ等が目立ち、後者からみてこの男性の脳頭蓋は少なくとも強度の長頭ではなかった可能性が窺える。これまで博多から出土した中世人ではかなり強度の長頭を共通の特徴とすることが明かになりつつあるが、唯一、第40次調査でやや短頭に傾く女性



博多遺跡58次調査
出土人骨
(男性、熟年)



左筋突起部に
みられる
骨増殖



人骨（中橋、1990）が出土している。それが本下顎と同じ11世紀所属の、やはり埋葬ではなく骨の一部が土層中に流れ込んだ状態で見いだされたものであることは興味深い。しかし同集団内でも頭型はかなり大きく変化するのが常であるので、今のところこうした点に何等かの意味をもたせるのは早計であろう。当下顎の形態的特徴に他の中世人資料との類似性が認められなかった点についても、博多の中世人としての特徴に問題付けて議論するには現時点では余りにも出土例が少なく、有意の議論は困難である。いずれについてもまずは追加例の出土を期すべきであろう。

最初にも記したように、博多の住人に、他地域の人々とどういう形態的違いが見られるのか、そしてその博多人の特徴がこの都市の発生、成長とどのような相関を見せるのか、こうした点はヒトの形態変化の要因を探るうえでも一つの有力な手がかりになるものと考えられる。今後とも僅かづつでも資料蓄積への努力が継続されることを期待したい。

（本資料を研究する機会を与えていただき、いろいろと御教示いただいた福岡市教育委員会の諸先生、諸氏に深謝いたします。）

文 献

- 原田忠昭(1954)：「現代西南日本人頭骨の人類学的研究」、人類学研究1。
- 清野謙次・宮本博人(1925)：「津芸貝塚人骨の人類学的研究、第2部、頭蓋骨の研究」、人類誌、41。
- 中橋孝博(1987)：「福岡市天福寺出土の江戸時代人頭骨」、人類学雑誌、95。
- 中橋孝博(1989)：「博多遺跡群第26次調査・築港線関係第3次調査出土の中世人骨について」、福岡市埋蔵文化財調査報告書204、福岡市教育委員会。
- 中橋孝博(1990)：「博多遺跡群第40次調査出土の中世人骨について」、福岡市埋蔵文化財調査報告書230、福岡市教育委員会。
- 中橋孝博・永井昌文(1985)：「山口県下関市吉母浜遺跡出土の弥生・中世人骨」、吉母浜遺跡、下関市教育委員会。
- 中橋孝博・永井昌文(1989)：「弥生人の形質」、弥生文化の研究1、雄山閣。
- 鈴木尚(1956)：「鎌倉材木座発見の中世遺跡とその人骨」、岩波書店、東京。

博多 23

—博多遺跡群第58次調査報告—

1991年（平成3年）3月15日

発 行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1-8-1
印 刷 セントラル印刷株式会社
福岡市中央区大宮1-5-13